

アトリエ 琉游舎 だより 40号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2018年11月21日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

秋霜草木を枯らす

- 平年はいつ頃霜が降りるのか調べていないので定かではありませんが、もういつ霜が降りていても不思議でない候となりました。
- 霜の降る条件を調べると「気温が4度以下」と「風が弱い」ことだそうです。風が強いと地表の空気がかき混ぜられて、気温が氷点下、湿度が100%になりにくいからです。
- 霜といえば霜害です。11月の霜は早霜。五月の霜は晩霜。大根・春菊・白菜は1, 2回霜が降りたくらいでは何とか乗り切れそうですが、今年の五月には晩霜一回で、胡瓜の苗をダメにしてしまいました。
- 秋の霜は、気温の変化が徐々に草木の生命活動を奪っていく、最後のとどめのようなものともいえますが、春の再生のための準備ともいえるでしょう。
- 「秋霜」は草木を枯らすことから、厳しい刑罰、人を寄せ付けない威厳、強固な意志をたとえて言う言葉でもあります。
- ところで「秋霜烈日」という熟語があります。秋に降りる霜と夏の厳しい日差しのことから、検察官バッジが霜と日差しの組み合わせに似ていることから、厳正な検事の職務とその理想像とが相まって、検察官の代名詞となっています。
- さて、そのバッジが狐や狸、猪に熊などの狡猾あるいは獐猛な獣を見逃し、か弱き草木（民草）を枯らすばかりでないことを祈るばかりです。

12月のスケジュール

12月のスケジュール			木 金 土 日			
月	火	水	22	23	24	25
26	27 読書会 13:30	28	29 映画会 13:30	30 映画会お休み	12月1日	2 居酒屋の会 16時~
3	4 写経会 13時半	5	6 映画会 13:30	7	8 詩話会 13時半から	9 写経会 13時半
10	11 読書会 13:30	12	13 映画会 13:30	14	15	16
17	28	29	20 映画会 13:30	21	22	23
24	25 読書会 13:30 居酒屋の会16時	26	27	28	30	30

詩話会
12月8日(土)
13時半から

読書会
11月27日(火)
12月11日(火)
12月25日(火)
13時半から

写経会
12月2日(日)
12月4日(火)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

今年もタヌキが車にはねられている姿を何度か目撃しました。猫であれば、一瞬動くものを認めると静止しますがすぐに素早く身を隠す行動に出ます。ところがタヌキは静止した後、またヨタヨタと歩き始めるのです。運転している人は猫と同じように素早く逃げ去ると思っているので、間に合わずにはねてしまうようです。このような光景を見るのは春の初めと秋の終わり。山の中で冬の飢えを耐え春になって食料探しに里に下りて、空腹でよれよれになっているところを車にはねられたのでしょうか。秋の終わりは冬に備えてお腹にいっぱい食料を詰め込んで、重い体をずるずると引きずっているところをはねられたのでしょうか。よくタヌキは人を化かすといわれていますが、あのヨタヨタ歩きを見ていると、滑稽さを覚えても狡猾さを感じることはできません。気の毒に、何であのような汚名を着せられたのでしょうか。

私が住んでいるこのコリーナという開発分譲地は、かつては里山と言われたところでした。里山は、ならやクヌギの落葉樹を中心とした森や竹林で構成されている、人の生活圏の周辺にある低山の森林地帯のこと。周辺に住む人々はおよそ30年周期でならやクヌギの木を伐採して薪や炭を焼いたり、椎茸栽培の原木にしたり、毎年落葉を集めて腐葉土の肥料にしていました。里山は人にとって経済価値の高い重要な資源だったのです。人は継続的に燃料と肥料を得るために、里山を管理し持続可能な循環型として使用してきました。しかし薪や炭は電気やガスへ、腐葉土は化学肥料に取って代わられてしまい、もはや手間暇にかかる里山の管理は不要になってしまったのです。そのおかげで私は今この土地に住むことができているのですが、その代償に循環型としての里山は失われ、ただ管理されない雑木林が周りに遺されることになりました。タヌキは「けものへんに里」と書きます。里山の生きものだった狸は、整備されたコリーナの居住地区と、かつては里山として整備されていたのに今や荒廃した山となりはてた住みかの間を、えさを求めて徘徊している時に車にはねられる、哀れな存在となってしまいました。

狸は里山と共に生きてきたのに、今ではそこに人が住んで里山を破壊してしまったわけですから、狸にとってはいい迷惑です。あとから入ってきた人間は少しは遠慮しても良さそうなものですが、なぜかあとから来た人間ほど、権利を主張し、声も大きく、賢く攻撃的なので、元いた生きものたちは小さくなっているしかないのが実情なのでしょう。野焼きの煙が洗濯物に付くと言って農家から野焼きの権利を取り上げ、牛舎が臭いといって移転を余儀なくさせると言う話しをよく聞きます。人間同士ならばまだ話し合う余地もありますが（でもたいがい先住民は負けます）居住地を侵された小動物たちはただ身を隠してひっそりと生きるしかないのでしょうか。

共棲という言葉があります。文字通り共に棲むと言うこと。では「共に棲む」ということはどういうことでしょうか。私はエコロジストでも動物愛護を標榜するものでもないのに、生きる権利や環境破壊、可哀想や可愛いなどの文脈で語るつもりはありません。「共に棲む」ことは「私も社会も自然も共に生きる」ことと私は考えます。「私が私ためだけのために生きること」はできません。「互いが持ちつ持たれつ」の「お互い様」の考えによって初めて「私が生きる」ことが可能になるのです。「縁りて起こる」という「縁起」の法則に従って説明すれば、私が今ここにあることは、私と私以外の全ての関係によって縁りて起こった「結果」であり、自らの行為によってもたらされたもの（自業自得）です。「共棲」は「お互い様」の原理によって支えられる概念です。そして「私は私以外の全てによって生かされている」ことを深く自覚して初めて可能になる言葉ではないかと考えます。

「共棲」は共に棲む他者と生きることですから、身近な例をいえば「夫婦」です。夫婦げんかは真の共棲に至るための重要な過程です。けんかという対立がお互い様という共棲の心に触れたとき、互いを必要とし、理解し、尊重し、そしてどちらか片方だけでは不可能であった新たな創造的関係を可能にしていくのではないのでしょうか。個人でも集団でも国家でも異なるもの同士が接触し融合し共棲していく過程で、対立や矛盾、戦いなどの緊張関係が生じないわけがありません。緊張関係の中から互いの共通部分を見だし拡げて行き、異なる部分は尊重し侵さないという「お互い様」の原理が働けば「共棲」への道を進むでしょう。反対に異質点を尊重せずそれを無きものにしようとするとき、緊張関係は服従や破壊、同化や抹殺への道を進むことになるでしょう。他者を理解し尊重し共感することは他者をありのままに観ることです。そしてその他者は鏡となって自分自身をありのままに観ることにもなるのです。ですから「共棲」の道を進むことはお釈迦様とともに「安らぎの処」へと向かうことなのです。

私がコリーナの自然や住む人々と共棲することは、私自身がありのままに観て考えて語り合い働きかけ続けることです。つまり不断の「行い」。ここに住み続けて2年半、私はここで、何によって何とともに生かされているのか、まだ分かっているわけではありません。ただあの車にはねられたタヌキと私は共棲していたとは決して言えないでしょう。里山を追われた生きものたちは人との **琉游舎：戸井 出琉・恭子** 共棲を望んでいるのでしょうか？最近の猪などの獣の目撃情報は、彼らによる里山再生への意思表示かもしれません。お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850